

連載

司書・司書教諭が知っておくべき

学校図書館のための情報リテラシー

第7回

学校図書館スタッフ自身が情報リテラシーを高める：クリティカルシンキングのすすめ(1)

日本女子大学 家政学部家政経済学科 准教授 後藤敏行

今回と次回は、学校図書館スタッフ自身が情報リテラシーを高めるのに役立つような内容にしたいと思います。

情報リテラシーとは、簡潔に言えば、何らかの問題に対処するために、情報の中から必要なものを選び出し、読み解き、問題の解決や新たな情報の創造・発信をする能力のことです(本連載第一回参照。わが国の教育政策でどう定義されているかなどの詳細は、第一回・第三回を参照)。

今回と次回は、これらのうち、「情報を読み解く」ことに焦点を絞ります。演習を交えるなどした講習会ではなく、紙面を通じて伝えやすいものは何か、考えた結果です。執筆にあたり複数の書籍を参考にしていますが、特に、『社会調査』のウツ・リサーチ・リテラシーのすすめ(文春新書)、『データはウツをつくす科学的な社会調査の方法』(ちくまブリマー新書)に大きな示唆を得ています。どちらも有名な本です。関心のある方は、実際に読んでみることをお勧めいたします。

なお、紙面を通じて伝えやすいものは何かを考えたとき書きましたが、前述の諸技能のうち、ほかのものについて、書籍などの文字情報が役に

立たないということではありません。「必要な情報を選び出す」ことについては、本連載第四回の「国内文献検索の手段やコツ」や「情報リテラシーに関する外国語論文」の節が一助にはなると思いますので、参考にしてください。

「問題の解決や新たな情報の創造・発信をする」ことに関しては、『日本語の作文技術』(朝日文庫)と『記者ハンドブック・新聞用字用語集』(共同通信社)という、二つの書籍を紹介しておきます。前者は、初版が一九七六年のロングセラーです。現在は「新版」として朝日文庫に収録されています。『実戦・日本語の作文技術』という続編もあります。まずは前者をお勧めします。「読む側にとって分かりやすい文章を書くこと」について学ぶことができます。

後者は、漢字と平仮名の使い分け、誤りやすい語句、日時・地名・人名・年齢の書き方などについて述べた、名前のとおり記者のためのハンドブックです。「本書が新聞、通信、放送だけでなく社会一般の文章表記にも役立つことを願っています」とまえがきにあるとおり、学校図書館スタッフも参考にできます。

クリティカルシンキング

情報を読み解くために必要な能力の中でも、本連載では、クリティカルシンキングと呼ばれる分野の話題を紹介いたします。クリティカルシンキングとは、日本語に訳せば批判的思考ですが、「何でもかんでも文句ばかりつける」という意味ではなく、「情報を鵜呑みにせず、冷静に、いろいろな角度から考える」のような意味合いです。以下、さっそく見ていきましょう。

例題一 以下の文章には、批判可能な点がある。どのような批判が可能か指摘しなさい。

「次の①～④の中から好きなスポーツ選手を選んでください」というアンケートを県内の中学生、高校生に行ったところ、イチローが二位を大きく引き離してトップだった。現役を引退したものの、中学生にまだまだ人気ようだ。
①イチロー ②香川真司 ③川島永嗣 ④長友佑都

①～④には、人気のスポーツ選手が並んでいます。なるほど、その中でもイチローはきつと、知名度・実績ともに抜群で、中学生に今も人気

もサッカーファンのほうがずっと多い」という場合、票が割れたとしても、サッカー選手の得票がイチロー選手のそれを上回るかもしれません。例題一のアンケートもそうかもしれません。特定の選択肢が上位に來るような意図的な質問を強制的選択 (Forced Choice) と呼びます。

例題二 以下の文章は、ある公共図書館の司書Aさんの発言である。Aさんの発言には、内容についてはなく、論理的に考えて、批判可能な点がある。どのような批判が可能か指摘しなさい。

司書A: これからの公共図書館は、ただ読書をしたり、本を借りたりするための施設ではダメです。医療・健康情報の提供や、ビジネス支援など、地域住民の課題を解決するサービスを提供したり、あるいは、地域住民が交流するための場になるべきです。

私が従来から強く思っていることの考えについて、仲の良い旧知の司書たちに意見を聞いてみました。ほとんどの司書たちが賛同してくれました。やはり、これからの公共図書館は、先のような方向に舵を切るべきだと再認識しました。

司書Aさんの、「これからの公共図書館は、ただ読書をしたり、本を借りたりするための施設ではダメです」「後略」という主張自体は、ひよっとすると、そのとおりかもしれません。ですが、「仲の良い旧知の司書たちに意見を聞いてみました。ほとんどの司書たちが賛同してくれました」「後略」という点に、調査がおそらくあります。

Aさんが意見を聴いたのは、「仲の良い旧知の司書たち」です。Aさんと意見が似ている人たちが多い可能性が高いと予想できます。また、サンプルの偏りとは別の着眼点ですが、Aさんの発言には「私が従来から強く思っているこの考え」ともあります。ひよっとすると、「本当はどちらでもよいのだけれど、ここはAさんに同調しておこう」と考える人もいたかもしれません。

ところが全国には、いろいろな考えの司書がいます。勤務先の図書館が都市部にあるか、そうでないかや、実務経験年数など、さまざまな要因によって、見解が異なると思われるかもしれません。そのような要因を考慮した、全国の司書の縮図となるような集団に意見を聴いた場合、Aさんの考えに

同意する声は、多数ではないかもしれませんが。さらに、司書だけでなく、利用者たる市民にもいろいろな要望がありそうです。「地域住民の交流は別のどこかでやってほしい。図書館では静かに読書をしてほしい」という人もいるかもしれません。つまり、Aさんが聴いた意見には、利用者の視点が欠けているかもしれません。以上が解答例です。

なお、Aさんのような考えに対して、実際に賛否は分かれており、多様な意見があります。例えば、日本図書館研究会の機関誌『図書館界』六八巻六号(二〇一七年三月)が参考になります。

日常、「もつとこういふ本が欲しい」「もつとこうしてほしい」などの声を耳にすることがあります。利用者の要求に応じる姿勢はもちろん大切ですが、「こういう要望があるが、学校図書館によく来る生徒や教員のものかもしれない」「校内全体を代表する意見ではないかもしれない。校内には別のニーズもあるかもしれない」と立ちどまって考えることで(サンプルの偏りに注意すること)、性急な対応や、偏ったサービスをしようとするのを避けることができるかもしれません。

※1付録 第1回「社会調査」のアンケートの作り方 後藤敏行(2019年10月) 株式会社少年写真新聞社 編集 2019年10月28日発行